

歐陽脩は二重人格か：詞の作成場面と受容環境に着目して

東, 英寿
九州大学大学院比較社会文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/4363577>

出版情報：中国文学論集. 49, pp.65-82, 2020-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

歐陽脩は二重人格か

——詞の作成場面と受容環境に着目して——

東 英 寿

一 はじめに

歐陽脩についての先行研究を調べると、歐陽脩が二重人格（双重人格）であるという論文が多々発表されていることに気づく。晏雁「從『六一詞』看歐陽修的双重人格」^①や肖永鳳「彬彬儒士与多情公子——浅析歐陽修詩文与詞作所体现的双重人格形象」、柏倩「論道与狂歡——用狂歡化理論分析歐陽修詩文和詞的分裂狀態」^②等がそれであり、それに反駁する論文も発表されており、たとえば何薈、胡林貴「歐陽修艷情詞新論——兼駁歐陽修『双重人格』說」、^③范衛平「『歐陽修人格分裂說』辨誤」^④等がある。そもそも歐陽脩が二重人格であるという主張は、彼の作る詩や文章と、詞の内容にあまりにも格差があり、様相を異にすることから生じた議論である。たとえば、章培恒、駱玉明『中國文學史新著』では、次のように記述する。^⑤

而詞中大量的情感性表述、又與歐陽修詩文的崇道抑情傾向形成巨大的反差。一個人在需要大量情感投入的藝術創造領域里、某些場合過度地宣泄情感（歐陽詞多借女性口吻大寫情詞可作例證）、在別一些場合又固執地抑制情感表露、這從某種程度上說、實有人格分裂之嫌。而這種人格分裂竟出現在被目爲一代宗師的歐陽修身上、又不能不說是宋代文學的一大悲哀。

また、詞の中の大量の情感に満ちた表現は、歐陽脩の詩文に見られる、道を尊び情を抑える傾向とはおおいな

歐陽脩は二重人格か

る徑庭がある。ある一人の人物が、大量の情感を投入することを求められる藝術創造の領域に於いて、ある場合には過度に情感を吐露し（歐陽脩の詞は、多くの場合、女性の口吻を借りて、情事に關わる詞を大量に書いているのはその例である）、別の場合には頑ななまでに情感の表出を抑制するとすれば、それはある程度、人格分裂の嫌いなしとしない。しかも、そうした人格分裂が、一代の宗匠と目されている歐陽脩の身に起こっているとすれば、それもまた宋代文學の大いなる悲哀であると言わざるを得ない。

道を尊び情を抑える傾向がある歐陽脩の詩や散文に対して、彼の詞では女性の口吻を借りて、大量に情事に關わる内容を書くというように過度に情感を吐露していることから、到底同じ人物の作とは思えず、もし同一人物が作つたとすれば人格分裂の傾向があると指摘する。さらに、そのことは宋代文學の大いなる悲哀であるとする。「宋代文學の一代悲哀」とは誇張された表現のように思われるが、歐陽脩が作る詞の内容に違和感を抱き、彼が二重人格であると解釈されているのは事実なので、そこで本稿においては歐陽脩の詞について当時の様々な資料を跡づけることを通して、詞が作られた場面とそれが受容された環境を明らかにした上で、彼に二重人格の嫌いがあつたのかということについて考察したい。

二 従来の歐陽脩詞の評価

歐陽脩の詞は、『近體樂府』三卷と『醉翁琴趣外篇』六卷によつて今日に伝わつてきている。『近體樂府』は南宋の慶元二年（一一九六）に周必大が故郷である吉州で完成させた『歐陽文忠公集』百五十三卷に収録されており、『醉翁琴趣外篇』は編纂者が不明であるが、南宋後期の淳祐十年（一二五〇）以降に刊行されている。『近體樂府』三卷には百八十一首あるいは百九十四首の詞が収録されており、『醉翁琴趣外篇』六卷には二百三首収録されている⁽⁸⁾。この二書に共通して収録されている詞は百二十四首であり、後述するように當時から歐陽脩詞には偽作が含まれると考えられていたようで、唐圭璋は取捨選択して『全宋詞』に歐陽脩詞として二百四十首を収録している。

歐陽脩の詞に偽作が含まれていることについて、南宋初の曾慥は「樂府雅詞序」の中で次のように言及する。

歐公一代儒宗、風流自命、詞章幼眇、世所矜式、當時小人或作艷曲、謬爲公詞、今悉刪除。

歐公は一代の儒宗、風流自命にして、詞章は幼眇にして、世の矜式する所、當時の小人或ひは艷曲を作り、謬りて公の詞と爲す、今悉く刪除す。

当時の小人が艷麗な内容の詞を作り、それが誤って歐陽脩の詞として広まっていたので、それらを全て削除したと述べる。さらに、南宋中後期頃の陳振孫は『直齋書録解題』において、歐陽脩詞（六一詞）について以下のように論じる。

歐陽文忠公修撰。其間多有與花間、陽春相混者、亦有鄙褻之語一二廁其中、當是仇人無名子所爲也。

歐陽文忠公修の撰。其の間に多く花間、陽春と相混する者有りて、亦た鄙褻の語も一二其の中に廁り、當に是れ仇人無名子の爲す所なるべし。

鄙俗な語句や俗艷な内容をもつ歐陽脩の詞は、彼に恨みを持っていた仇や敵が作り、歐陽脩詞として広められたと陳振孫は述べる。歐陽脩は北宋の政治家として、また儒学の大家として名高く、その彼に鄙俗な語句や俗艷な内容の詞はあるはずがないと陳振孫は考え、それらは偽作であると断言するのである。

ところが、そのようなバイアスをかけずに、歐陽脩作として伝わる俗艷な内容を持つ詞を歐陽脩詞として受けとめると、北宋時代の高級官僚であり、官界の指導者的存在でもあった歐陽脩像と奇妙な違和感が生じてしまい、それが前述したように歐陽脩が二重人格であるという主張と結びついたと考えられる。彼に俗艷な詞があるのは二重人格であれば首肯できるといふ主張である。

一方、正反対な内容を持つ詞があることについて、それらを全て歐陽脩詞として受けとめるべきだといふ見方も

歐陽脩は二重人格か

ある。田中謙二氏は「歐陽脩の詞について」の中で、「そのほとんどが公の手になったと見て、別にふしぎはないと思ふのである。その方が、あの政治家として、或は哲学史学文学そして金石学など多方面にわたる学者・作家として、一五三巻の文集以外にも膨大な著作を遺した巨人歐陽文忠公の、人間的振幅をさらに大ならしめて痛快きわまらない」として、内容が俗艶であってもそれが「人間的振幅」の大きさの表れであると受けとめるのである。

以上をまとめると、儒家の大家である歐陽脩に俗艶な内容の詞は絶対あり得ないとしてそれらを偽作として除外してしまうという、所謂門前払いをしてしまうか、そうした俗艶な内容も全て彼の詞と認めてしまい、彼には二重人格の嫌いがあつたと主張するか、はたまた詞の内容に些か奇異の感はあるが、それらを含めて人間的振幅の大きさだと考えるか、という三つの大きな方向性が提示されていることがわかる。ただ、これらの見解は、いずれも歐陽脩詞をどのように評価するか、どう受け止めるかという考え方の提出であつて、実際に歐陽脩が俗艶な詞を作成したかどうかを論じているものではない。従つて、実際に俗艶な詞を作つたかどうかを考察する必要があるが、詩や文章に存分に才能を發揮した歐陽脩にとつて、詞の中に俗艶な内容を書き込むことができるという技量そのものがあつたのは間違いない。多くの詞を残している歐陽脩にとつて、詞作成の技量があつたことについては疑う余地には歐陽脩には俗艶な詞を作る場面があつたのか、そしてそれが受容される環境があつたのかということを考察することが重要だと思われるのである。

三 俗艶な歐陽脩詞

歐陽脩が詞を作つた場面やその受容環境を考える前に、まずこれまで俗艶であると言われてきた歐陽脩詞の幾つかを取り上げて、どのように俗艶なのかという確認をしておきたい。たとえば次の「醉蓬萊」^⑩があげられる。

見羞容斂翠、嫩臉勻紅、素腰袅娜。紅藥闌邊、惱不教伊過。半掩嬌羞、語聲低頓、問道有人知麼。強整羅裙、

偷回波眼、佯行佯坐。

更問假如、事還成後、亂了雲鬢、被娘猜破。我且歸家、你而今休呵。更爲娘行、有些針線、諗未嘗收囉。卻待更闌、庭花影下、重來則个。

見れば、羞ずかしそうな面は翠の眉を斂め、やわらかな臉は紅色ほんのり、素き腰は裊娜と。紅い芍薬の垣根のほとり、彼を惹きつけて行かせない。かわいらしい羞らいを、半ば掩いかくしつ、話す聲も低くふるえ、訊ねるには誰かに知られやしなかつた？ わざとらしく羅の裙を整え、こっそり秋波を送り、立ちかけてみたり坐つてみたり。

更に訊ねることには、もしも濡れ事を終えたあと、雲なす鬢が亂れたら、おつ母さんに見破られやしなにかしら？ 私ほひとまず家へ歸ります、あなたも今はおきなさいな。その上おつ母さんのためにしなくちゃ、ちよつとばかりの針仕事、まだ片附かなくて叱られてるのがあるんだわ。それより夜がふけてから、庭の花の影もと、もう一度来て下さいな。

ここには情事に関わつた若い女性の姿が具に見て取れる。女性の眉や頬、腰を「羞容斂翠、嫩臉勻紅、素腰裊娜」と描き、さらに髪の毛が乱れていることよつて情事が母親に見破られはしないかという女性の心の揺れ動きを「事還成後、亂了雲鬢、被娘猜破」と描写する。最後に、夜が更けてからもう一度会いたいと結ぶことで、相手のことを一途に思っている様も描き出されている。次の「南郷子」では女性の初恋の想いが描写されている。

好个人人、深點脣兒淡抹腮。花下相逢、忙走怕人猜。遺下弓弓小繡鞋。

剗襪重來。半鞞烏雲金鳳釵。行笑行行連抱得、相挨。一向嬌癡不下懷。

口紅を濃く塗り、うつつらとお白粉をはたいた愛しの彼女と、花咲くもとでランデイブしました。ふと彼女は人目を恐れ慌てて曲つた小さいぬい通りの布靴を残して走り去りました。

彼女は走つたので、結つた髪につけた金屬製の鳳凰のかんざしを半分垂れ下げ、靴下のままひきかえし、笑い

歐陽脩は二重人格か

ながら歩み、行き行き私と手をつなぎ抱擁し、しばらくの間、甘えて私の胸から離れませんでした。美しくも甘きうぶな戀の想い出。

ここでは、美しく化粧をした女性が花が咲き誇る中でデートをし、人目を感じたので鳳凰のかんざしを垂れ下げたまま靴下で走って立ち去ってしまい、その後引き返してきて抱擁をし甘えて胸からしばらく離れなかったと描写する。人の気配を感じてあわてるという、うぶな若い女性の姿が映し出され、この詞全体からデートの一場面が眼前に生々しく浮かび上がってくる。

前掲の「醉蓬萊」について、『中国詞人選』の中で村上哲見氏は次のように論評する。⁽¹²⁾

歐陽修は柳永とは異なつて高級官僚であり、かつ当時の文章界の指導者でもあった。その人にかなりな数の艷情の詞があることは、まことに奇妙な取り合せで、それだけに宋代からすでに偽作だという説がある。彼が科擧の総裁を勤めたときに落第させられた者たちが、その名声を傷つけんがために、この種の詞を彼の作として世にひろめたのだという。たしかに柳永を除けば同時期の他の文人にはみられない種類の作品であるだけに些か奇異の感がないではないが、かといつて右の偽作説にも確証があるわけではない。

歐陽脩が「醉蓬萊」に見られるように情事に関わつた女性やその心の揺れ動きを具に書き綴ることは村上氏の指摘のように確かに違和感を感じさせる。同じく「南郷子」に見られるように、うぶな女性のデートの有り様を歐陽脩が赤裸々に綴つたりするだろうかという疑問も生まれる。もしも歐陽脩が一人で静寂な雰囲気の部屋に籠つて、このような詞をひねり出していたとすれば、確かに二重人格の嫌いがあると指摘されても仕方がないかもしれない。従つて、このような詞を作成する場面、すなわち歐陽脩が詞を作成していたシチュエーションの検討や当時それを受容する環境があつたかどうかということが重要になると考えられるのである。高級官僚であり当時の文章界の指導者でもあつた歐陽脩が、果たしてこのような詞を作成する場面やそれが受容される環境があつたのであろうか。

四 宴席と歐陽脩詞

歐陽脩が詞を作った場面について、北宋の錢世昭『錢氏私志』には次の如き逸話がある。

公責妓云、末至何也。妓云中暑往涼堂睡著、覺而失金釵、猶未見。公曰若得歐陽推官一詞、當爲賞汝。歐即席云、柳外輕雷池上雨、雨聲滴碎荷聲。小樓西角斷虹明。闌干倚處、待得月華生。燕子飛來窺畫棟、玉鉤垂下簾旌。涼波不動簾紋平。水精雙枕、傍有墮釵橫。坐皆稱善。遂命妓滿酌稱歐、而令公庫償其失釵。

公は妓を責めて云く、末に至るは何ぞやと。妓云く、暑さに中りて涼堂に往き睡著し、覺めて金釵を失し、猶ほ未だ見えずと。公曰く、若し歐陽推官の一詞を得れば、當に爲に汝を賞すべしと。歐は即席に云く、柳外輕雷池上の雨、雨聲滴りて荷聲を碎く。小樓西角斷虹明らかなり。闌干倚る處、月華の生ずるを待ち得たり。燕子飛來して畫棟を窺い、玉鉤簾旌を垂れ下ろす。涼波動かず簾紋平らかなり。水精の雙枕、傍らに墮釵の横たわる有り。坐すもの皆な善しと稱す。遂に妓に命じて滿酌し歐を稱せしめ、而して公庫をして其の失釵を償はしむ。

初めて任官した洛陽で歐陽脩は一人の妓女と親しくなった。ある日、妓女が落とした簪を一緒に探していたので宴席に遅れてしまった。上司である錢惟演が遅れてきた理由を問いただし、そこで歐陽脩が即席に一詞を作成したことによって咎められず、しかもその詞の素晴らしい出来映えによって賞賛までされた。この「柳外輕雷池上雨」で始まる詞は、「臨江仙」として歐陽脩の詞集である『近體樂府』、『醉翁琴趣外篇』に収録されているが、それは妓女との宴席で作成されていたのである。また、『近體樂府』卷二の卷末（国家図書館本、天理本、四部叢刊本等）に跋（作者不明）が掲載されており、そこには次のように記載する。

荆公嘗對客誦永叔小闋云、五綵新絲纏角粽、金盤送、生綃畫扇盤雙鳳。曰三十年前見其全篇、今才記三句、乃

歐陽脩は二重人格か

永叔在李太尉端願席上所作十二月鼓子詞。數問人求之、不可得、嗚呼荊公之沒二紀、余自永平幕召還、過武陵、始得於州將李君誼。追恨荊公之不獲見也。誼太尉猶子也。

荊公嘗て客に對して永叔の小関を誦して云ふ、五綵の新絲にて角を纏くる粽、金盤送り、生綃の畫扇に雙鳳盤す。曰く三十年前其の全篇を見、今才かに三句を記すのみ、乃ち永叔の李太尉端願の席上に在りて作りし所の十二月鼓子詞なり。數しばしば人に問ひ之を求むるも、得可からず、嗚呼荊公の沒して二紀にして、余は永平幕自ら召還され、武陵を過り、始めて州將李君誼を得。荊公の獲見せざるを追恨するなり。誼太尉は猶ほ子なり。

王安石が歐陽脩の詞を暗誦しており、三十年前は全編を知っていたが、晩年の彼はそのうちの三句しか思い出せなかった。その詞は「十二月鼓子詞」であった。「鼓子詞」とは同一曲を反復し、せりふをはさんで鼓に合わせて唱われるもので、「十二月鼓子詞」は歐陽脩が李端願の宴席上で披露したものであった。この跋の作者は、王安石が亡くなつて二十年後にその詞を手に入れた。この「十二月鼓子詞」とは、『近體樂府』、『醉翁琴趣外篇』のどちらにも収録されている「漁家傲」で、正月から始まり十二月で終わる十二首のことである。その中の「五月榴花妖艷烘」で始まる「漁家傲」に、確かに王安石が暗誦していた「五綵新絲纏角粽、金盤送、生綃畫扇盤雙鳳」という一節がある。この「漁家傲」（「十二月鼓子詞」）は王安石も暗誦するほどであったが、それはもともと歐陽脩が宴席で披露したものが広まったことが窺える。

さらに、北宋の文瑩『湘山野録』巻上に、次のような記述がある。

又歐陽公頃謫滁州、一同年將赴閩倅、因訪之、即席爲一曲歌以送、曰、記得金鑾同唱第、春風上國繁華。……………

予皇祐中、都下已聞此闕歌於人口者二十年矣。又た歐陽公は頃ろ滁州に謫せられ、一同年將に閩の倅さいに赴く、因りて之を訪ね、即席に一曲の歌を爲り以て送る、曰く、記し得たり金鑾に唱第を同じくす、春風上國繁華なり。……………予は皇祐中に、都下に已に此の闕を聞くに人口に歌はるること二十年なり。

「記得金鑾同唱第」で始まるのは「臨江仙」であり、『近體樂府』、『醉翁琴趣外篇』のどちらにも収録されている。歐陽脩が左遷されて滁州に滞在していた時、ある同年が閩州で通判をしており、彼のために送別の宴を開き即席で「臨江仙」を作った。この「臨江仙」は人口に膾炙すること既に二十年であると記載され、長く歌い継がれてきた所謂当時のヒット曲になっていたと言つてよいであろう。それは、椅子に座り机に向かつて熟慮を重ねて生み出されたものではなく、歐陽脩が送別の席で即席に作ったものであった。宴席の雰囲気に合わせて即興で作られた詞が、当時長く歌い継がれていたことになる。

このように、歐陽脩の詞は宴席で唱われることが多く、しかも彼は宴席において詞を即席で作ることもあった。もちろん、それ以外の場面で作られた詞もあるであろうが、ここで見てきたように詞が披露されそれが受容された場の一つとして宴席があったことは注目すべきである。

五 歌妓と歐陽脩詞

当時の宴席ではとりわけ歌妓（妓女）の存在が欠かせないものであった。王兆鵬氏は『宋代文学伝播探原』の中で、北宋の詞人である晏殊や南宋の辛棄疾について次のように記述する。¹³

至于家中私宴、更少不了歌妓的演唱助興。北宋晏殊就是典型的例子。他居家“未嘗一日不燕飲”、每宴“必以歌樂相佐”。辛棄疾也是“每燕、必命侍妓歌其所作”詞。

邸宅での私的な宴會に至つては、歌妓が歌い興を添えないことには何もはじまらない。北宋の晏殊の例がその典型である。彼は家にいるときには、「これまで一日として宴席を設けないことはなかった」のであつて、宴を催すごとに「必ず歌樂により宴席の助けとした」という。また辛棄疾も「宴會のたび、必ず侍妓に命じて自分が作った詞を歌わせた」という。

晏殊が開いた宴席では必ず歌妓が歌い興を添えていた。彼は多くの詞をつくったと言われるが、それらはほとんど宴席で歌妓によつて唱われていたと思われる。また南宋の詞人として名高い辛棄疾は自分の詞を宴席において侍妓に唱わせたと言う。宴席で出席者に披露し、これによつて彼の詞が世に受容され広まっていたという側面は見逃せない。詞が伝播するきっかけとして、詞が歌唱される場面すなわち宴席という場の力が強く作用しており、しかも歌妓が詞の伝播のために大いに助けとなつていたことが窺える。

さらに、歌妓自らが宴席に招かれた人の詞を歌うこともあった。たとえば、賈昌朝が歐陽脩を宴席に招いた際、その宴席で歌妓が唱つたのは全て歐陽脩の詞だったという。北宋の陳師道『後山談叢』卷三に、

文元賈公北都に居守し、歐陽永叔使北還、……既燕、妓奉觴歌以爲壽、永叔把瓊側聽、每爲引滿。公復怪之、召問、所歌皆其詞也。

文元賈公北都に居守し、歐陽永叔北に使いし還る、……既に燕し、妓は觴を奉じて歌ふに以て壽を爲す、永叔瓊を把り側聽し、毎に引滿と爲す。公復た之を怪しみ、召して問ふに、歌ふ所は皆な其の詞なり。

と記載され、自分の詞が宴席で唱われることで自然と杯が進み、歐陽脩は自分の詞を聞かたびになみなみと酒が注がれた杯を飲んでいたのである。また、歌妓が歐陽脩詞を暗誦していたことについて、北宋、趙令時『侯鯖録』卷一に「歐公閒居汝陰時、一妓甚韻。文公歌詞盡記之」（歐公汝陰に閒居する時、一妓甚だ韻あり。文公の歌詞盡く之を記す）と記載され、歌妓が歐陽脩詞を全て暗誦しており、この歌妓が宴席で彼の詞を歌っていたことが推測できよう。

このように当時、詞は宴席で歌妓によつて歌われ、詞と歌妓は切っても切り離せない関係であった。しかも、宋人は歌妓を抱えるのが一般的となり、歐陽脩自身も歌妓を召し抱えていたことに注目したい。北宋の葛立方『韻語陽秋』卷十五に次のように記述する。

余謂永叔作此詩時、已爲內相。觀其所作長短句、皆富豔語。不應當此以汙尊俎。永叔特自謙之辭爾。梅聖俞嘗和其詩云公家八九妹、鬢髮如盤鴝、朱唇白玉膚、參年始破瓜。余謂らく、永叔此の詩を作る時、已に内相爲り。其の作る所の長短句を觀るに、皆な豔語に富む。應に此れ以て尊俎を汙すに當たるべからず。永叔特に自謙の辭のみと。梅聖俞嘗て其の詩に和して云ふ、公家の八九妹、鬢髮は盤鴝の如く、朱唇白玉の膚、參年始めて破瓜なりと。

ここでは歐陽脩の作る詞（長短句）は艶語に富んでいるが、それは宴席（尊俎）を汚さないとして艶語が宴席にマツチしていたことを示唆している。さらに、「公家八九妹」と記述して歐陽脩が抱えていた歌妓に言及するが、それは次に挙げる梅堯臣の「次韻和齋永叔」中に詠み込まれている。この詞は『梅堯臣集編年校注』によれば嘉祐四年（一一〇五九）の作であり、当時歐陽脩は五十三歳であった。

歌舞未終宴、夕暮各興嗟。所嗟歸路暗、嘶馬自知家。公家八九妹、鬢髮如盤鴝、朱唇白玉膚、參年始破瓜。歌舞未だ宴終わらず、夕暮各おの嗟きを興す。嗟く所歸路暗し、馬嘶き自ら家を知る。公家の八九妹、鬢髮は盤鴝の如く、朱唇白玉の膚、參年始めて破瓜なり。

梅堯臣は、歐陽脩の家には八、九人の妹、すなわち美しい歌妓がいたという。前述した如く、晏殊は邸宅での私的な宴会では、自分の抱えていた歌妓に自身の詞を唱わせ興を添え、辛棄疾は歌妓に自分の詞を唱わせて広めていたのであり、歐陽脩が抱えていた歌妓が宴席で彼の詞を歌っていたことも容易に想像がつく。

王兆鵬氏は、歌妓と詞の伝播について次の如く記述する。

宋代的詞、多由女性歌妓傳唱、歌妓的美麗面容可以悅目、清亮的歌喉和優美的音樂可以娛耳、較之單純地通過詞作文本的閱讀就多了兩層悅目娛耳的效能。

歐陽脩は二重人格か

宋代の詞は、多く女性の歌妓によって歌い傳えられ、歌妓の美しい容貌は人の目を喜ばせ、澄んだ歌声と優雅な音楽は人の耳を樂しませたため、單純に詞作のテキストを通して讀むよりも、耳目を樂しませるといふ二層の機能が加わるのである。

歌妓が唱う詞は、歌妓の見目麗しさとその美しい歌声により、一層人々の心に響くようになる。テキストを通すのではなく、詞は歌妓に唱われることで人の耳目を樂しませ、人々に受容されて伝播していく。歌妓である女性の口から発せられる詞には、女性の視点からの内容が適しているのは言うまでもない。男性が中心である聴衆は酒宴の雰囲気合うような内容を聞きたいであろう。このような場面で、男性である詞の作者が宴席の雰囲気とは無関係に自らの主義や思想を詞の中に入れ込む余地はないであろう。詞を唱う者とそれを聴く者の環境に合わせて、詞の内容、風格は艶麗、俗艶へと傾くのであった。

しかも、宴席で即興で作られた詞は口頭によって伝承していくのであり、決してテキストに文字を起こすようなものではなかった。歐陽脩は晩年に自らの詩文集『居士集』五十巻を編纂したが、その編纂の様子について南宋の沈作喆は『寓簡』巻八において次のように記述する。

歐陽公、晩年常自竄定平生所爲文、用思甚苦。其夫人止之曰、何自苦如此、當畏先生嘖耶。公笑曰、不畏先生嘖、卻怕後生笑。

歐陽公、晩年常に自ら平生爲りし所の文を竄定するに、思ひを用ふることに甚だ苦しむ。其の夫人之を止めて曰く、何ぞ自ら苦しむこと此の如きか、當に先生の嘖りを畏るるか。公笑ひて曰く、先生の嘖りを畏れず、卻て後生の笑ひを怕ると。

歐陽脩は、晩年に精力を傾けて苦勞して自分の詩文集である『居士集』を編纂していた。それを見かねた夫人が心配し、どうしてこのように苦心してまで編纂するのかとたずねたところ、後世の人から笑われるのを恐れてのこ

とだと答えた。歐陽脩は後世に自分の作品をしつかり伝えようとして、苦心して『居士集』を編纂していたのである。彼が完成させたその『居士集』五十巻の構成を確認すると次の通りである。

卷一〜九「古詩」、卷十〜十四「律詩」、卷十五「賦、雜文」、卷十六〜十七「論」、卷十八「經旨、辯」、卷十九「詔冊」、卷二十〜二十三「神道碑銘」、卷二十四〜二十五「墓表」、卷二十六〜三十七「墓誌銘」、卷三十八「行狀」、卷三十九〜四十「記」、卷四十一〜四十三「序」、卷四十四「序、伝」、卷四十五〜四十六「上書」、卷四十七「書」、卷四十八「策問」、卷四十九〜五十「祭文」

ここで注目すべきは、歐陽脩が『居士集』に自分の詞を収録していないことである。つまり、後世の人を強く意識し編纂した『居士集』に詞を収録していないことは、歐陽脩自身も詞を後世に残す作品とは全く考えていなかったことを物語っている。言い換えると、歐陽脩にとって詞は宴席での一過性のものであるが故、その詞を残す必要がないのであり、一過性であるが故にその場の雰囲気に合わせて作成できるのである。

さらに、歐陽脩の内容を見ていくと、歌妓が宴席で進んで主人や客に詞を求め、即興的に詞を作っている様も読み込まれ、しかもいつも同じ詞ではなく歌妓は新しい詞を求めて唱い、客を喜ばせようとしていたことも裏付けられる。たとえば、歐陽脩の「玉楼春」に「青春才子有新詞、紅粉佳人重勸酒」（青春才子に新詞有り、紅粉の佳人重ねて酒を勸む）と読み込まれており、青春才子が宴席で新詞を作っていたと記述する。宴席で歌妓の求めに応じて即興で詞を作り、その詞は歌妓自身が唱うもので、歐陽脩が歌妓の立場に合わせて、艶めかしい語句や情事の場面、デートの有り様等を読み込んでいたと言える。次の歐陽脩の「減字木欄花」からは、宴席で歌妓が詞を唱い、聴衆と一体となって盛り上がっている様子が窺える。

歌檀斂袂。繚繞雕梁塵暗起。柔潤清圓。百琲明珠一線穿。櫻唇玉齒。天上仙音心下事。留住行雲。滿坐迷魂酒半醺。

歐陽脩は二重人格か

歌檀袂を斂む。繚繞たる雕梁塵暗かに起る。柔潤清圓なり。百琲の明珠一線穿つ。櫻唇玉齒。天上の仙音心下の事あり。行雲往くを留む。滿坐迷魂して酒半ば醺なり。

酔いもたけなわ、そこで歌妓が詞を唱い聴衆である男性はそれを聞く。唱われる詞はその場の雰囲気と融合し「滿坐迷魂酒半醺」となつて、「櫻唇」、「玉齒」の美しい歌妓が宴席の滿座の客と一体となつてゆく。このように詞の唱われた場の状況とそれが受容された環境を踏まえれば、詞の内容が艷麗、俗艷であつても何ら不思議ではないのである。

六 おわりに

南宋の羅大経が『鶴林玉露』卷二丙編において、歐陽脩の詩文作成について次のように述べる。

楊東山嘗謂余曰、文章有體、歐陽公所以爲一代文章冠冕者、……如作詩、便幾及李杜。作碑銘記序、便不減韓退之。作五代史記、便與司馬子長竝駕。作四六、便一洗崑體、圓活有理致。作詩本義、便能發明毛、鄭之所未到。作奏議、便庶幾陸宣公。雖游戲作小詞、亦無愧唐人花間集。蓋得文章之全者也。

楊東山嘗て余に謂ひて曰く、文章に體有り、歐陽公一代の文章冠冕爲る所以は、……如へば詩を作るに、便ち幾ど李杜に及ぶ。碑銘記序を作るに、便ち韓退之を減ぜず。五代史記を作るに、便ち司馬子長と竝駕す。四六を作るに、便ち一つに崑體を洗ひ、圓活にして理致有り。詩本義を作るに、便ち能く毛、鄭の未だ到らざる所を發明す。奏議を作るに、便ち陸宣公に庶幾し。游戲にて小詞を作ると雖も、亦た唐人花間集に愧づること無し。蓋し文章の全を得る者なり。

歐陽脩が遊戲で詞を作つていたと記述していることに注目したい。彼が宴席において詞を即興で作成していた行

爲は、まさしくここで言う遊戯的性格を帯びていたと言えるのではないだろうか。さらに、宴席以外に、歌舞を上演する際にも歐陽脩の詞が唱われていたことがわかる資料がある。それは、歐陽脩の詞集『近體樂府』卷一に収録された「西湖念語」とそれに続く「采桑子」十首である。「西湖念語」では次のように記述する。

昔者王子猷之愛竹、造門不問於主人。陶淵明之臥輿、遇酒便留於道上。況西湖之勝概、擅東潁之佳名……因翻舊闋之辭、寫以新聲之調。敢陳薄伎、聊佐清歡。

昔者 王子猷の竹を愛して、門に造るも主人を問わず。陶淵明の輿に臥して、酒に遇へば便ち道上に留まる。況んや西湖の勝概は、東潁の佳名を擅にするをや。……因りて舊闋の辭を翻し、寫すに新聲の調を以てす。敢へて薄伎を陳べ、聊か清歡を佐けん。

「念語」とは歌舞上演の前口上のことで、この「西湖念語」では西湖の美しさを強調し、歐陽脩が既存の旋律に合わせて作った「新聲」、すなわち西湖の美しさが読み込まれている「采桑子」十首へと続ける。蘇軾の「陪歐陽公燕西湖」詩の施元之注には「歐陽文忠公……作念語及十詞歌之」とあり、この「西湖念語」に続くこれらの「采桑子」十首が歌われていたと記載する。さらに、胡可先『宋代詩詞実証研究』では、この「西湖念語」について「鼓子詞的形式、往往是前小序、稱『念語』或『致語』、以說明由來。《采桑子》前的《西湖念語》就是非常典型的鼓子詞的形式」（鼓子詞的形式では、しばしばその前の『念語』或いは『致語』と称する小序で由来を説明する。《采桑子》の前の《西湖念語》は非常に典型的な鼓子詞の形式である）と記述し、この「西湖念語」で由来が述べられた「采桑子」は鼓と共に唱われた鼓子詞であったことを指摘する。前述した鼓に合わせて唱われた「十二月鼓子詞」と同様に、「采桑子」十首も鼓とともに唱われ、聴衆に受容されていたのであり、そこには娯楽的側面があったことは見逃せない。

王兆鵬氏は詞が歌われる環境について次のように述べる。¹⁸⁾

宋人重視女聲唱詞、而女性歌妓演唱的場所又多半是在娛樂性和消遣性的宴會酒間、歌樓妓院、听衆到此的主要

歐陽脩は二重人格か

目的は尋求感官刺激。爲適應這種演唱的雰圍和演唱者歌妓的身分、詞的題材就只適宜于表現帶有刺激性的嫵媚動人的女性和女色。

宋人は女性の詞の歌唱を重視し、女性の歌妓が歌う場所もまた大半は娯樂と憂さ晴らしを主とする宴会の酒席、歌樓妓院であり、聴衆がここに足を運ぶ主な目的は感覚の刺激を求めることにあつた。このような公演の雰圍氣と歌唱する者たる歌妓の身分とに合わせて、詞の題材は刺激的となり、艶やかで人の心を動かす女性とその容色とを表現する方向に向かつていったのである。

娯樂や憂さ晴らしを主とする宴席で歌妓は詞を唱い興を添える。その雰圍氣に合わせて作られた詞は、時として刺激的になるほどであつた。男性を中心とする聴衆に対して、歌妓は女性でありその女性が唱うために歐陽脩は詞の中に女性の情事や初恋等を読み込み、女性の身分やその場の雰圍氣に合わせようとしたのである。このように詞の作成場面とそれが受容された環境を考えると、詞は遊戯的、娯樂的性格を帯びており、その内容が俗艶、艷麗になるのは問題ではなく、むしろ臨場感あふれる艶やかな詞を作ることこそが必要であつた。従つて、その詞の内容が俗艶であることを以て、それが作者の人格の表出であるという考え方は甚だ見当違いであることがわかる。つまり、これまでのように、詞に書かれた文字だけで判断するのではなく、詞が作成された当時の場面やそれが受容された環境を考えるべきなのである。

それでは、歐陽脩が二重人格であつたかどうかという問題に戻ると、二重人格であるということについて、これまで述べてきたように詞の内容から判断するのは間違ひであることは明白である。そこで歐陽脩の他の作品に目を向けてみると、残された書簡の中に眼がみえにくくなって、白と黒しか判別できないようになり歯がぐらぐらするという糖尿病の症状が書かれ、書簡「又与王郎中」の中では自ら「淋濁の疾」と記述していることから歐陽脩が糖尿病でありそれを自覚していたこともわかるが、二重人格と思わせるような記載は全く見いだせない。また既に見てきたように、詞が作成された場とそれが受容された環境を考え合わせると、詞の中に人格が表出するという前提、つまり歐陽脩の詞に二重人格という性格が表出しているという観点は成り立たない。逆に言えば、二重人格と錯覚

させるほどの詞を作成した歐陽脩の技量は高く評価されるべきであろう。そもそも、先行研究で詞の内容が彼の文章や詩と違っていることを根拠として二重人格かどうかという問題を設定したこと自体、全くありえないことなのであった。

注

- (1) 『曲靖師專學報』第十一卷第二期、一九九二年。
- (2) 『六盤水師專學報(社会科学版)』一九九三年第二期、一九九三年。
- (3) 『語文學刊』二〇一〇年第六期、二〇一〇年。
- (4) 『内江師範學院學報』第二十九卷第五期、二〇一四年。
- (5) 『南昌大學學報(人文社會科學版)』第四十六卷第四期、二〇一五年。
- (6) 上海文芸出版社、復旦大學出版社、二〇一一年。なお、日本語訳については、井上泰山、後藤祐也訳『中国文学史新著(増訂本)』(関西大学出版部、二〇一三年)に依った。
- (7) 四部叢刊や四庫全書の『歐陽文忠公集』に収録されている『近體樂府』には百八十一首の詞が収録されているが、天理本『歐陽文忠公集』収録の『近體樂府』には百九十四首収録されている。この収録詞数の違いは『近體樂府』の成立過程と関連しており、その詳細については拙稿「吉州本『近體樂府』考」(『日本中国学会報』第七十二集、二〇一〇年)を参照されたい。
- (8) 拙稿「歐陽脩『醉翁琴趣外篇』の成立過程について」(『風絮』第二号、二〇〇六年)参照。
- (9) 田中謙二「歐陽脩の詞について」(『東方学』第七輯、一九五三年)。
- (10) 「醉蓬萊」の日本語訳(大意)は、村上哲見『中国詩文選』(筑摩書房、一九七三年)に依った。
- (11) 「南郷子」の日本語訳は波多野太郎『宋詞評釋』(櫻楓社、一九七一年)に依った。
- (12) 注(10)村上哲見『中国詩文選』二百十九頁の記述。

歐陽脩は二重人格か

- (13) 王兆鹏『宋代文学伝播探原』（武漢大学出版社、二〇一三年）八十五頁の記述。なお該書は、萩原正樹、松尾肇子、池田智幸監訳『宋代文学伝播原論——宋代の文学はいかに伝わったか——』（朋友書店、二〇一九年）として、日本語訳が刊行されており、以下王氏の著書を引用する際には全てこの日本語訳に依拠した。本稿は王兆鹏氏の『宋代文学伝播探原』に多くの啓発を受けて作成したものであり、王氏には感謝の念に堪えない。

- (14) 注(13) 王兆鹏『宋代文学伝播探原』七十五～七十九頁参照。

- (15) 朱東潤編年校注『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）。

- (16) 注(13) 王兆鹏『宋代文学伝播探原』十二頁の記述。

- (17) 浙江大学出版社、二〇一九年。百五十五頁の記述。

- (18) 注(13) 王兆鹏『宋代文学伝播探原』百頁の記述。

- (19) 歐陽脩が糖尿病であったことが書簡から窺えることについては、拙稿「歐陽脩と古文——古文の大家が生まれ出てきた過程——」（『わかりやすくおもしろい中国文学講義』中国書店、二〇〇二年、収録）参照。

〔附記〕 本研究は、JSPS 科学研究費18H00651の助成を受けたものである。